

(国語)

「言葉に対して自覚的になる子どもの育成」
—児童が主体的に取り組む国語科の授業づくりを通して—

大阪市内九条北小学校 研修部

1. 研究主題設定の理由

本校は、これまで自分の思いや考えを進んで表現できる子どもを育てるため、書く指導法の工夫を研究してきた。自分の考えが明確に表現できるように構成を考えたり、相手や目的に応じて書くことがらを整理したりする力の育成に取り組んだ。研究を通して、自分の思いや考えを書き表すことができると、自信をもって伝えようとするとともに、「もっと書きたい」「違う表現で表してみたい」という意欲につながると再確認できた。一方で、言語力の向上については十分とは言えず、「どう書いたらいいかわからない」「自分の考えや思いをうまく表現できない」など、書きたい気持ちはあっても、それを表すための語彙力が伴っていないことも明らかになった。

そこで、2年前から、研究主題を「言葉に対して自覚的になる子どもの育成」とし、さらに「児童が主体的に取り組む国語科の授業づくりを通して」を副題として研究を進めることにした。

2. 研究の趣旨

児童の実態から、自分の思いや考えを伝え、豊かに表現するには語彙力向上は必要不可欠であると考えた。読める・書ける・使える言葉を増やしていくことで、言葉を通して自分の思いや考えが形成され深められるようになっていく。「言葉に対して自覚的」になっている児童の姿として、一例ではあるが、「立ち止まっている」「選択している」「集めている」「予測している」ときであると仮説を立て、研究を進めていくこととした。また、これまでの研究討議会等で「国語科の授業づくりの難しさ」について多くの意見が挙げられた。そのため、まず、指導者が明確な意図をもった国語科の授業づくりを行うことが大切であり、各授業においてどのような語彙の獲得をめざすのかを明らかにして、授業づくりに取り組んでいくことが重要であると考えた。そこで、この2つの点を踏まえ、授業実践を通して研究を進めていくこととした。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点①児童が叙述や記述に「立ち止まる」ための指示・発問の工夫

○発問へのしかけ

- ・児童が言葉にこだわって読むための指示・発問の工夫に重点を置いて、教材研究に取り組む。また、言語活動の設定を明確にする。

○発問の分類

- ・構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成など指導者が意識して発問を行う。

視点②学びを広げるための言葉を「選択しながら」対話する姿を引き出す対話指導の工夫

○学習用語の定着と活用

- ・国語科の学習用語をもとに、読みを深めたり、新たに教材を読んだりする。

○対話の方法、対話を活性化するための言葉の吟味

- ・基本的な話型の提示により、対話の基礎・基本の定着。
- ・対話をするときの、相槌、共感、質問などを表す言葉を増やす。

視点③(広義の)語彙力拡充のための言語環境の充実

○辞書引き

- ・一人一冊、国語辞典が使用できるよう環境を整備する。

○同義語、類義語、対義語、具体、抽象、上位概念、下位概念など、言葉の上下への広がり

- ・児童が言葉に着目できるような発問の工夫。
- ・教室掲示などを工夫し、定着を図る。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 指導者が、児童がこだわって読むための教材研究や授業展開を考え、指示・発問を工夫することに重点をおいて取り組んできた結果、言葉を根拠とし読みを広げていこうとする姿が見られた。
- 付けたい力に応じた言語活動を設定することにより、児童が自分の考えや思いを主体的に表現する活動につなげることができた。
- 研究討議会を活性化するために、ワークショップ型の討議会を取り入れ、研究の3つの視点に焦点を絞り交流を行ったことで、授業者だけではなく、参観者一人ひとりが今後の授業に生かせるような授業の視点をもつことができた。
- ペアやグループでの話し合いなど交流の場を積極的に取り入れた結果、児童が学習課題を意識したり、考えを比較しながら聞いたりし、思考を深めることができた。
- 低学年からの積み重ねにより、中・高学年では、学習中に常時、国語辞典を机の上に置き、分からない言葉があるとすぐに意味を調べるようになった。さらに、自分の思いを表現するために必要な言葉を、国語辞典を引いて見つけ、より良い言葉を使おうとするようになっていくとともに、他教科でもそのような姿が見られるようになってきた。

(2) 今後の課題

- 対話活動を取り入れることで、児童は言葉を選択して伝えようとするようになってきた。対話によって再考したり、違う考えを知ったりするなど、学びを広げるための対話を活性化させる、さらなる工夫を考えていく必要がある。
- 言葉に対して自覚的になる子どもの育成を目指し、これまで実践を積み重ねてきた。今後は、系統化を図れるよう、取り組んでいく。